

◎ES細胞研究者が謝罪 「倫理的洞察力に欠けていた」

【クリスチャントゥデイ、11/26】2年前に世界で初めてクローン技術を使った胚性幹細胞（ES細胞）の作製に成功した黄禹錫（ファンウソク）・ソウル大教授は24日、研究過程に倫理規定の違反があったことを認め謝罪。研究の責任者を辞任する意向を表明した。

黄教授は「全ての責任は私にある」と述べ、部下の女性研究員2人から卵子の提供を受けたことを認めた。

同教授は、世界初のES細胞バンク「世界幹細胞ハブ」（本部・ソウル大）の責任者に就任し、クローン細胞を使って難病やけがを治す「再生医療」の先駆者として注目されてきた。日本でも北海道大に研究生として在籍した。

同バンクなど複数の研究機関の代表を辞任。今後は研究に専念する。

AP通信英語版によると、記者会見で黄教授は「この恥ずべきことを社会に発表しなくてはならないことを、心から残念に思う」と述べた。「本来は研究の成功をご報告すべき場であるのに、今日は謝罪しなくてはならないことをお詫びしたい」

卵子提供のビジネス化や脅迫行為を防止する目的で、国際倫理規定では、卵子提供にともなう金銭や利益提供が禁じられている。上司が研究目的で部下に卵子提供を求める行為を禁止する規定も複数存在する。

韓国でも1月に生命倫理ガイドラインが施行され、卵子提供にともなう金銭や利益提供を禁じた。だが、黄教授の研究チームへの卵子提供は施行前だった。

黄教授は獣医で、専門は動物繁殖生理学。ヒトクローン胚（はい）から世界で初めてES細胞をつくることに成功し、ES細胞研究の第一人者として国際的に知られた。研究ではヒト胚細胞を破壊して幹細胞をつくるため、一部のキリスト教医療団体や家庭保護団体は研究に反対している。

研究関係者によると、ES細胞は様々な細胞へ分化する能力と高い増殖能力を持つため、失われた細胞を再生して補う新しい医療「再生医療」の発達が期待されている。パーキンソン病、心筋梗塞、脊椎損傷、白血病、糖尿病、肝臓病など現在治療が困難な病気の治療に応用されるという。

会見では、ES細胞研究の是非は指摘されず、黄教授と研究チームが実験用卵子を得る過程に問題があったことが焦点となった。

昨年5月、英科学誌が、黄教授が部下の女性研究員2人から卵子の提供を受けたとする疑惑を提起、黄教授は「提供の事実はない」と否定していた。

韓国メディア朝鮮日報などによると、会見で黄教授は、この研究員たちに確認した結果、研究員が仮名を使い、同教授の許可なしに卵子採取を行っていたことが当時判明していたと明かした。

だが、英科学誌には事実と異なる回答をした。提供者がプライバシーの保護を要求したほか、研究員が教授の許可なく提供した卵子のために倫理問題へと発展することを恐れたという。

黄教授は「当時、事実を打ち明けていたら、今回のようなことにはならなかったと思うと後悔する」と悔やんだ。

研究に使用された卵子のうち、提供者に報酬を支払って調達されたものが含まれていたことを教授が知ったのは今年10月末になってのことという。卵子採取の委託先である病院の理事長が教授に事情を説明した。

黄教授は当時、与えられた研究と研究の達成に没頭するあまり倫理や法に対する考えが不十分であったと述べた。また倫理と科学が人類の将来を決定する重要な課題であることを再認識したと語った。

黄教授は研究の倫理的課題について以前からキリスト教など宗教関係者と意見交換を重ねていた。

◎「ポッドキャスト」は伝道にも利用可能

【C J C、11/21】インターネットから画像や音声を取り込み利用する「ポッドキャスト」は次世代のラジオになる可能性を秘めている。キリスト教界でも伝道などへの利用可能性に着目する動きが出ている。カトリック教会ではすでにバチカン放送が7月から番組を提供している。これまでで最もダウンロードが多かったのは、8月の教皇ベネディクト十六世のインタビューだった。

修道会『イエズス会』（イタリア）が発行する雑誌『ラ・チビルタ・カトリカ（カトリック文明）』11月5日号は、牧者にとって、デジタルジュークボックスを通して現代のキリスト者に接触するという、重要な新しい方法だ、と指摘している。教会は典礼や祈り、説教などを「ポッドキャスト」を通じても利用出来る機会を見逃すべきではない、と言う。

4. I STILL HAVEN'T FOUND WHAT I'M LOOKING FOR

I have climbed the highest mountain
I have run through the fields
Only to be with you
Only to be with you

I have run
I have crawled
I have scaled these city walls
Only to be with you

But I still haven't found
what I'm looking for

I have kissed honey lips
Felt the healing in her fingertips
It burned like fire
This burning desire

I have spoke with
the tongue of angels
I have held the hand of a devil
It was warm in the night
I was cold as a stone

But I still haven't found
what I'm looking for
But I still haven't found
what I'm looking for

I believe in the Kingdom Come
Then all the colours will
bleed into one
But yes I'm still running

You broke the bonds
You loosed the chains
Carried the cross
And my shame
And my shame
You know I believe it

But I still haven't found
what I'm looking for
But I still haven't found
what I'm looking for

終末論

1. 終末論の具現としての「神の国」
2. 神学における終末論の変遷
3. 現代における終末論の展開

1

1. 終末論の具現としての「神の国」

2

導入的イメージ(1)

山のあなた

山のあなたの空遠く
「幸」さいわい(住むと人のいふ)
噫(ああ)、われひとと尋とめゆきて、
涙さしくみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

(カールラッセ作、上田敏訳)

3

導入的イメージ(2)

⇒ U2, *I still haven't found what I'm looking for*

- I believe in the Kingdom come
Then all the colors will bleed into one
But yes I'm still running
- You broke the bonds, you loosed the chains
Carried the cross
And my shame, and my shame
You know I believe it
- But I still haven't found what I'm looking for

4

「神の国」とは何か？

- ⇒ 「神の国」はイエスのメッセージの本質的部分と考えられてきた。
 - 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15)
- ⇒ イエスは、間近に迫った神の国の到来を宣べ伝える終末論的人物として説明されてきた。
- ⇒ 20世紀における「神の国」
 - ナショナル・アイデンティティとの結合

5

「神の国」の言語学的位置づけ

- ⇒ 「バシレイア・トゥー・テウー」
 - 支配→「神の支配」
 - 支配領域→「神の国」
- ⇒ Kingdom of God → Dominion of God
Reign of God

新しい概念の模索

家父長的であるという
フェミニストたちからの批判

6

「神の国」の現在性と未来性

「しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに**来ているのだ**」(マタイ14:25)

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国は**あなたがたの間にあるのだ**」(ルカ17:20-21)

現在 → 未来

「はっきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい」(マタイ26:29)

2. 神学における終末論の変遷

終末論の論点

- 「今すでに」と「いまだなお」の間の緊張関係
- A. シュバイツァー、徹底的終末論
 - 黙示文学的預言者としてのイエスの発見
- J. モルトマン、W. パネンベルク(60年代)
 - 黙示文学的終末論の再評価
 - 終末論の社会的次元の回復

近年の聖書学の成果

- 切迫した神の国の到来を史的イエスに帰することが自明ではなくなってきた。
 - 神の国の切迫性は、イエス伝承の編集者に遡るという理解
- 神の国の非黙示文学的解釈の台頭。
 - J.D. クロッサンは現在の「知恵志向的」(sapiential)、かつ貧農を中心とする神の国運動にイエスを位置づける。**知恵の教師**イエス。

3. 現代における終末論の展開

終末論の現代的展開の一例

- オウムによる地下鉄サリン事件(1995年)以降、異常な行動を正当化してしまう異常な世界観として終末論がクローズアップされる。
- オウムには、世界の「**将来**」を見定める「**最終責任者**」としての自負があった。
- オウムはキリスト教の終末論を利用している。

終末論のポジティブな側面

- 「個」の確立：自ら責任を負う「個」としての人間を発見する。「個」の強度を育む。
- 個人が自分の人生の「最終責任者」。

13

終末論のネガティブな側面

- 最終責任を自分以外の権威者や集団にゆだねてしまう。
- なぜ、高度な教育を受けた者たちが、オウム流の終末論のとりこになってしまったのか？
- オウムの終末論と、教育家族に潜在する終末論は「共振」関係にある。

14

世俗化した終末論

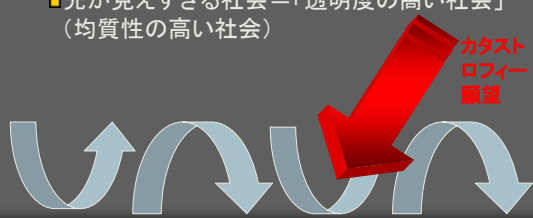
- 「しっかり勉強しないと、よい学校に入れない。よい学校に入れないと、よい就職ができない」といった人生行路が親から子に伝授される。
- 親は、子の人生を先取りし、将来を予言する、現代の「予言者」である。



15

なぜ「終わり」を求めるのか？

- 「終わりのない日常」から脱するため。
- 終わりが無い ≠ 先が見えない
 - 先が見えすぎる社会＝「透明度の高い社会」（均質性の高い社会）



16

終末論の可能性と展望

- 社会を変革する力として
 - 「宗教は阿片である」(マルクス)のか？
 - 解放の神学に象徴される「耐え難き現実」を変える力
- 運命論への挑戦
 - 自己決定権・生物学的運命論の拡大に対して
 - 根元的偶然性への気づき
 - カルヴァンの予定説
 - 「われわれが『予定』と呼ぶのは、神の永遠の聖定であり、よってもってそれぞれの人間におこるべく欲したもうたことを、自ら決定したもうものことである。なぜなら、万人は平等の状態に創造されたのでなく、あるものは永遠の生命に、あるものは永遠の断罪に、あらかじめ定められているからである。」(『キリスト教要綱』第3篇第21章5節)
- 宗教多元社会における指針
 - 死、病、テロなど人間の限界状況に対する理解と応答
 - 特に、イスラームの終末論に対する理解

17

「終わり」の視点

- 「『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけぬ。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」(マルコ13:6-7)。
- 虚偽の「終わり」に抵抗し、多様かつ豊穡な「終わり」の視点を獲得していく必要性。

18